国語学

アイヌ語と国語

金田一京助

國語科學講座

—IIII—

國語學

アイヌ語と國語

金田一京助

株式會社
明治書院

國語科學講座

— IV —

國語學

アイヌ語と國語

金田一京助

株式會社

明治書院

次

アイヌ語と國語

金田一京助

緒言

國語とアイヌ語の問題は、歸するところ、次の三問題に要約されるのではないかと思ふ。

第一は、アイヌ人がこの國土の原住民であつた關係上、若しや、アイヌ語が、後に茲へ來て國を建てた我々大和民族の國語の基礎になつた言語ではなかつたかといふ問題である。

第二は、世界諸國語の系統關係上、東隣のアイヌ語と日本語とは、同じ根源から分れた同系の親近語族に屬するものではなかつたかといふ問題である。

第三は、有史以前からの永い接觸である關係上、兩國語の間に、必然語彙の交渉があつた筈だが、如何なる語彙が如何なる程度に融合して吾々の國語が出來てゐるかといふ問題である。

さて第一の問題は、國語の起原の問題に關聯して來て、若しこの第一問が肯定される場合には、一々の日本語の語原を究めるにあたつて、アイヌ語を逸視することが出來なくなり、一々の單語は必ず、アイヌ語彙まで遡つて追究さ

れなければならず、國語學上、アイヌ語は、やかましい重要な言語となつて來ることである。

第二の場合からは、若し親近關係が設定される段になると、アイヌ語と日本語との語彙・語法の對照が直ちに『比較言語學』を構成し、比較研究に由つて、兩言語が二つに分岐する以前の形體へ遡ることが出來、國語史上に甚大な光を投じる最重要な言語となるべきことである。

第三の場合は、比較的にその重要性を輕減して來るものではあるが、相互に滲透した影響、特に、國語の中に混じてゐるアイヌ語の研究は、これに由つて、彼我の交渉を跡づけることが出來ると共に、その有りの儘の姿を復現することは、內地に失はれた所の新しい國語資料を提供する興味深い研究を約束するであらう。

そのほか、アイヌ語の原始的な語形態の研究は一般文法的立場から、國語の上の樣々な形態の起原的考察に、數々の示唆を與へる。併し、これらのことは又自ら別種の問題を成すものであるから暫く省略し、上述の第一・第二・第三の問題を、以下順を追つて追究して見るとしよう。

第一章　アイヌ語と國語の關係

アイヌ種族が日本の國土の原住民だつたとする考から、その用ひる言語までも、日本語の原語でもあつたかの樣に決めてかゝる考は、これまで、特定の學者に由つて明瞭に提唱されたことでは無いが、漫然そのやうな豫想を以て臨まれてることは、吾々の屢〻出逢ふところである。果して然るか。

アイヌ語は、日本語の原語だ、と明瞭には云はないでも、少しでも兩方の間に形の似た單語がある場合、悉くアイ

ヌ起源の語であるやうに取扱はれるバチラー博士など、この論者の筆頭であられると見て好からう。例へば、アイヌ語のペコ(牛)と東北方言のベコ(牛)、アイヌ語のチャペ(猫)と秋田方言のチャペ(猫)、その外、馬がアイヌでウーマ又はウンマであり、小刀がアイヌでも、青森・秋田でもマキリであり、下駄がアイヌ語にピラッカ、青森・秋田にヒラカである等々、その他、アイヌ語の金(コンカニ)・銀(シロンカニ)・銅(フレカニ)(フレは赤の義)・鉛(ヤヤンカニ)(ヤ、ンは「たゞの」の義)等から日本語の金(かね)・黄金(こがね)・白金(しろがね)が出たのだと說かれるやうなのは、殆んど日本語を以つて、アイヌ語をそのまゝ取つて出來上つた國語だとされるものである。

バチラー博士說では、邦語ベコ(牛)はアイヌのベコ(bek-o)又はペコ(pek-o)で、アイヌ語で bek が牛の聲の寫聲、語尾の -o は to"hold" "carry" である。同樣に、邦語の猫(ネコ)はアイヌ語のメコ(mek-o)であり、mek はアイヌで猫の聲の寫聲であるから、丁度 bek-o が"to low"(「モーと云ふ」こと)であるやうに、mek-o は"to mew"(「ニャーと云ふ」こと)だといはれるのである。

序に今一つ、邦語の猿(さる)は、アイヌ語の sar-o で、アイヌ語に sara は「尾」であり、-o は "to bear" で、それで sar-o は卽ち「尾がある」"having a tail" の意味だといはれる。

これ等の說明は仲々面白い。アイヌに o と云ふ短い形の動詞があつて、それが名詞のあとへ添へられて、存在を意味することが多い。虱がキであつて、キオは「虱たかりの」「虱の多い」意味になり、節がイク(ik)であつて、「節のある」を ik-o (空虛な莖が kuttara であつて、虎杖を iko kuttara といふなど)といふ。それが sar-o「尾のついてる」「尾のある」となることは少しも無理がない。猿は人間によく似てゐて、尻尾があるからさう云つたらうといふ考であ

らうから、意味の方から面白い。たゞ北海道には猿といふものが居なかつた。その猿を知つたのは新しいことで、又その名も寧ろ近代になつてから邦人に聞いて取込んだものである。その點が疑問である。必然こゝに二つの問題が起る。卽ち、それではアイヌが日本の內地にゐた時にサロと云つたのを邦人が使用するに至つたか、といふのが一つ、江戸の末期に邦語サルを取込んで、尾があるものだから、自分の方に引きつけて、sar-o と訛つて行つた、民衆語原意識が造つた新形ではないか、これが第二の問題である。一の方は立證することが六ケしく、二の方は極めて考へられ易い。

Bek-o, mek-oにしても同樣に、邦語を取込んで用ゐてゐるうちに、民衆語原意識が結合してしまつてゐるやうである。そして、眞正にアイヌ語として生じたものならば、sar-o-p, bek-o-p, mek-o-pでなければいけない。このpがなくつては形容詞の形であつて、名詞にならないのである。こゝが缺點である。それで愈ゝ第二說の方が可能性が濃くなつて第一說の方は破棄されて來なければならないのである。實際、牛馬が北海道へ渡つて、アイヌが始めて見て驚き走つたのは、たつた今から百二三十年前のことで、ペコやウンマの語を口にしたのはそれからなのであつた。

尙、同博士のアイヌ英和辭典第三版(大正十五年版)の序論に見える「古代日本語とアイヌ語との間に類似する語根」の中に――

「吾(あ)」とアイヌ語のa(第一人稱)とを擧げ、あへもの(和物)とアイヌのアエプ(食物)とを指摘し、「有(あ)り」とアイヌのアン(有)を對照しなどした後に、小豆(あづき)がアイヌでアンツキ(antuki)であつて、tuk "to sprout" が語根だらうと述べ、又日本で、「のぼり」は "a hill" であるが、アイヌ語、ヌプリ(nupuri)は「山」で、この外に大山を表はす語がアイヌ

に無く、この語の語根は nup「平原」で、それに複數の零辭 u が附き、「高」を意味する ri が附いたのだといふ。又日本のオーギ(扇)とアイヌ語の anki. amunki, aungi "a fan" とを擧げて、an-un-ki は "to do unto" で、恐らくは、扇を自分の方へ引く様に動かす運動に關係するといふのである。

又日本語 omushi は帝の御所で（多分オマシの積り?）、アイヌ語の「座席」の意の om-ushi だとされ、アイヌ語の om は股で ushi は「置く所」で「股をおく所」即ち日本語の腰掛だと。

同書、序論のつゞきの「現代日本語とアイヌ語との比較」の條には――

	アイヌ語	日本語
水	aka	aka（閼伽?）
在	an	anu（aruの誤植か）
暗・匿れた	an	an（暗）
歩行す	arupa	aruku（歩く）
新	ashiri	atarashi（新し）
我等	chin(?-chiの誤植か)	chin（朕）
古	fushko	furui（古い）

以下の三十餘語を擧げてある。

以上の說は、アイヌ語を以て國語の原語と考へての說で、この考は、證明されなければならない事を未檢討のまゝ

出發點としてゐるのである。

即ち、アイヌが日本の全土にゐたものとして考を立てゝゐるのであるが、それは、これから證明されなければならない、不確かな事實である。

日本全土から見出される紋繩土器を、紋樣のない土器から區別して、その紋樣がアイヌの模樣の手法を想起させるものだから、假りに、名をアイヌ式土器と呼んで區別をしたまでゞあつて、もと〳〵それがアイヌの用ひた土器だといふ意味ではなかつたのに、名に誤まられて、アイヌ式土器の存在する限り、アイヌが居住したやうに思ひ込んだのである。

今日精確にわかる限りでは、東部日本にアイヌが居たことである。その勢力が、東部日本から、中央部の何れの邊まで及んでゐたかは、今後の絕好の研究課題であつて、あらゆる史的科學全面よりの綜合的研究に俟たなければ明瞭しないことである。或はその結果を以てしても、遂に、東部日本から、幾らも中央部へ乘り出して居なかつたとなるかも知れないのである。して見れば、西部日本の古代文獻に現はれてゐる日本の「古語」は勿論のこと、その「名殘り」として中國・四國・九州・琉球の地方にまで分布してゐる樣な普遍的な方言を捉へて、多少アイヌの語彙に似た點があつても、それを一々アイヌ語起原に擬するといふことは、少くとも科學的態度であるといふことは出來ない。指摘されるその語例に至つては一々反證を擧げる迄もないから、吾々は「アイヌ語は日本語の原語か」に就ては、これ以上の言議を費すことを止める。

第二章　アイヌ語系統論

アイヌ語の話される地域の關係から、及びその文法の極めてざつとした大綱が吾々と似てゐる所から、卽ち、熊が馬を殺した(Kamui umma raike)、酒を飲む(sake ku)、煙草を飲む(tampako ku)、村へ歸る(kotan ta hoshipi)、濱へさがる(pish ta san)の樣な構造や語序で行くものである所から、漫然アイヌ語を以て、日本語などに近い言語である樣に考へ、また進んでは、日・鮮・滿・蒙・ツングース・トルコなどの言語を包括した所謂アルタイ語族がみな略〻かういふ構造や語序で行くものだから、アイヌ語もさういふ言語と同族のものと考へたり、或は、いま少し廣く、芬蘭語・匈牙利語などをも罩めて云ふウラルアルタイ語族の中に、アイヌ語をも罩めてかゝつてゐる學者が多いやうである。

果して然るか。さう思つて間違ひが無いか。今迄に、かういふ意見をはつきり示した文獻の中で、最も出色のものは、堀岡文吉氏の『日本及び汎太平洋民族の研究』である。これは、一歩進んで南の方のマレイ語までを一緒にして、汎太平民族の一大言語族を想定してかゝり、アイヌ語を以て、マレイ語と共に、日本語・朝鮮語などと同系の言語であるとするものであつた。これに就いては、曾て都新聞の文藝欄に賴まれて十日間に亙つて、論評したことがあるから、今は省略に附するが、大膽無比の論法であつて、その方法や渉獵の仕方は、到底今日の科學の前には認められないものだつたといふことを述べて置く。

帝國大學名譽敎師バシル＝ホール＝チェンバレン氏ひとりは、日本語とアイヌ語とは、全然系統を異にする異種の言

語であると見、十五條の論據を提示してこれを詳論した。それは明治二十年の文科大學紀要「アイノ研究より觀たる日本の言語・神話及地名」と題する著名な論著の中に見えてゐる。その大要に曰ふ——

一、國語は後置詞のみであるのに、アイヌには前置詞がある。例へば

E chuppok un chup ahun.　　O chupka un chup hetuku.
西　　日　入　　東　　日　出づ

二、アイヌの後置詞は、語頭にも立つ。日本のてにはには、さういふことはない。例へば、

私の母は Ku koro hapo　　汝の母は e koro hapo　　太郎の母は Taro koro hapo

この「の」にあたる Koro が全く語頭へ立つて、たゞ koro hapo「彼の母」といへる。

又「…ほど」「ぐらゐ」の位置の後置詞 Pakno は、

Tan moshiri ka ta, pakno utari inne utara isampe paskuru chironnup no ruwe ne.
此の 國土 上 に それほど 眷族 多き ともがら 無きもの(は) 烏 (と) 狐 である こと である

「この世に於てそれほど眷族を多く有するものが無いのは烏及狐だ。即ち、烏・狐ほど眷族の多いものはこの世に無い」

三、一寸それを頭へつけると受身になるといふ接頭辭、一寸それを頭へつけると形容詞が動詞になるといふ接頭辭、さういふ全く語形式に屬する接辭がアイヌにある。

受身にする　a-　　raike（殺す）——a-raike（殺される）

動詞にする　e-　　pirika（好し）——e-pirika（もうかる）

また、　e-　mik（吠える）——e-mik（吠えかゝる）

従つて　a-e-mik（吠えかゝられる）

四、アイヌ語の受身は眞正の受身である。歐洲の諸國語などにある樣な。日本語の受身は英語で云つたら、to get killed, to get laughed at のやうなもので眞正の受身ではない。アイヌは受身をば歐洲人よりも多く使ふ。例へば

Ene a-kari ka isam　何とも致され方も無い

日本語だつたら何とも致し方ないと云ふ所である。

この所は、アイヌ語に關する限り、說明の仕方に今一息といふ感があるが、兩語の差異をしつかり見てゐる點は、決定的である。

五、アイヌ語は澤山に再歸相を有する。

Yai-erampoken「自分に悲しむ、失望す」

六、アイヌには眞正の代名詞がある。日本には君とか僕とか、卽ち、尊敬か卑下の名詞のほかに眞正の代名詞がない。アイヌには第二人稱 eani; e 第一人稱 k'ani; ku; k' など。而も歐洲語の樣に、やつぱり、語句每に出て來る。

e koro shike　汝の荷物（日本語だつたら、「御荷物」——どこにも代名詞がない）

k'ani k'eraman　我了解す（日本語だつたら、「わかりました」——どこにも代名詞がない。）

Satporo-kotan ta ohonno k'an kuni ku ramu yakun, ku koro oiwange kuru ku tura wa k'ek koroka
札幌 の 鄕 に 久しく 我居る べく 我 思つた なら 私 の 召使 人(を) 我 同伴して 我來 けれど
iruka, k'an kuni ku ramu kusu, ku sakno k'ek ruwe ne.
暫 我居る べく 我 思つた ゆゑ 我 伴れずに 我來た こと である

七、アールヤ語などのやうにアイヌも、代名詞に、なにがしかの格の痕跡がある。

單數	ku「私が」	en「私に」
複數	chi「私達が」	un 或は i「私達に」

日本語には全然無いことである。

八、アイヌの動詞に複數の活用の痕跡がある。

	單數	複數
入る	ahun	ahup
出る	oashin	oaship
下る	ran	rap
おりる	san	sap

或るものには p 或は b が不規則に出る。

始める	heashi	heashpa
咲く	hechirasa	hechiraspa
起上る	hopuni	hopunpa

全く別形を取るものもある。

行く	arapa	paye

来る　ek　ariki

もつと調べたら、もつとあるだらう。日本語には人稱も無いやうに複數が無い。

九、日本語の動詞は歐羅巴の曲折（インフレクション）のやうに、語根に密着せる活用がある。

ot-os-u　ot-os-e　ot-os-i

アイヌ語には、前條に述べた場合の外は全然助動詞でやる。

一〇、日本語には、將然・連用・終止・連體・已然で動詞の形が變るが、アイヌ動詞にはさういふことが無い。

一一、日本には、文語にも口語にも、古語にも現代語にも、敬語がある。アイヌ語には、世界一般の言語に普通な丁寧な語法を、さう呼ぶにあらざる限り、敬語といふものは無い。

この一條は少し認識不足だつた。アイヌにタブーから發した特殊の敬語法が發達してゐて、普通の詞遣ひを Uwa-riekar（榮えさす云ひ方）と云ふに對し、iokurushte（影を曳かせる云ひ方）といひ、やかましいものである。但しその用ひ方の習慣や構成は、全然吾々の方の行方と異るものであるから、その爲めにこの條の結論に影響を來すものでは無い。

一二、日本語にはもとラリルレロで起る語が無かつたものであるのに、アイヌにはある。

一三、日本では各格（ノミナチヴ）の代りによく屬格（ジエニチヴ）を使ふ。「人が來る」といふのは即ち本來は "the coming of the man" であつて、それを "The man comes" に代用してゐる。アイヌにはかういふことは見えない。

これは少し六ケしい事である。アイヌ語で、

Taro ipe hemaka?

といふと、『太郎の食事が終つたか』ともなり『太郎は食事し終つたか』ともなつて元來區別しがたいのである。

Eipe hemaka?　an-ipe hemaka.

『御飯がおすみですか』『濟みました』といふ事であるが、『汝の食事が終つたか――『私の食事は終りました』とも聞こえ、『汝は食事し終つたか――私は食事し終りました』ともなるのである。

一四、打消法がちがふ。アイヌは “shomo” “seenne” などいふ打消の副詞があつて動詞に先行するが、日本語では動詞の後へ打消の助詞で否定をする。

これは大した重要な事ではない。そして私は日本語でも古代には、さうだつたのではないかといふ假定をすらもつてゐる。

一五、數詞の構造から觀ると、兩民族はその數へ方の上に根本的な相違をもつ。

これは注意すべき有名な發見である。

チェンバレン氏の揭げられた十五條の論據といふのは大體以上の樣なものである。アイヌ語の構造に關する知識には、後に述べるごとく、未だ必ずしも十分でない所はあつたが、大體の見當は今日尙少しの動搖もない所であつて、この論斷のあつた以後は、實は日本語との同系統などは生れ出づべき餘地が無かつたのである。

第三章　アイヌ語の本質的特徴

アイヌ語が日本語と違ふとすると、朝鮮語や滿洲語・蒙古語・ツングース語との關係はどうであるか。それには、アイヌ語の語法上の最も根本的な特徴が、どういふ所に存するかを見ることが必要である。

アイヌ語法上の第一の特徴は、古來まだ何人にも云はれて居ないことではあるが、その動詞が人稱差別をもつ言語であるといふことである。

即ち、國語ならば、例へば打つは、我でも「打つ」汝でも「打つ」彼でも「打つ」、常に「打つ」であつて人稱に由て形が變るといふことは無いのであるが、アイヌ語では、同じ kik「打つ」が、

第一人稱　a-kik「(我)打つ」

第二人稱　e-kik「(汝)打つ」

第三人稱　kik「(彼)打つ」

かうなるのである。

だから本當は、「アイヌ語で打つは kik といふ」は、實は誤りで、「アイヌ語で kik は彼打つである」といふべきである。從つてアイヌ語の辭書は、kikを "to strike" と譯出するのも實は不當で、"he strikes" と譯出して、規則動詞と書き入れて、第一人稱は a- 第二人稱は e- を附ける活用に屬する動詞だといふことを知らしむべきものなのである。今迄の世界的辭書の遺憾ながら不完全な所以である。

但し右は雅語での活用で、雅語では第一人稱が單・複同形を用ひるからまだ簡單だが、口語では精細に云ひ分けて規則動詞が次の樣になつてゐる。

	單數		複數	
第一人稱	ku-kik	我打つ	a-kik「我等(相手をも含めた)打つ」	chi-kik「我等(相手を含めずに)打つ」
第二人稱	e-kik	汝打つ	echi-kik「汝等打つ」	
第三人稱	kik	彼打つ	kik (-pa)「彼等打つ」	

以上は他動詞・準他動詞(第一類動詞)の活用であるが、完全自動詞(第二類動詞)は少し變つた形をとつて次の様になる。

第一人稱	ku-itak「我話す」	itak-an「我等(相手を含む)話す」	itak-ash「我等(相手を含まぬ)話す」
第二人稱	e-itak「汝話す」	echi-itak 汝等話す	
第三人稱	itak「彼話す」	itak(-pa) 彼等話す	

所がこの第二類動詞の中には、複數の時に語幹を異にするものがある。pa が附くもの、-p になるもの、全然別形を取るもの。例へば、

	單數の語幹	複數の語幹
起きる	hopuni	hopunpa
歸る	hoshipi	hoshippa
入る	ahun	ahup
出る	ashin	aship

のぼる	yan	yap
くだる	san	sap
在る	an	oka
來る	ek	arki
行く	oman	paye

だからアイヌ語の辭書の各動詞には必ずこの第一類か第二類かを示さねばならず、第二類の內、複數語幹の異形を取るものについては、「複數語幹は斯う」と、擧げて示さなくてはいけない筈なのである。この第二類は非常に澤山あつて、而も又、接頭辭を採ると、その接頭辭によつては、第二類から第一類の活用になるものがあり、第一類から第二類の活用に轉じるものもあるからである。

今迄の本に、動詞のこの活用の種類までを觀察したものがないのである。

在來の本は、動詞はすべて只一種類の活用でもあるかの如くに見做して、あまつさへ接頭辭のa- e- ku- chi-の類を凡て獨立に意味をもつ代名詞であると思つた。それだから、チェンバレン氏の樣にアイヌ語は無茶に澤山代名詞を使用する言語だと云つたのであるが、この人稱辭がある爲めに、實際の代名詞の方は、實は無用になる位で、よく〳〵の時でないと用ひられない。アイヌ語は代名詞をば滅多に用ひない言語だと、正反對に云へるくらゐなのである。

尤も、それだから日本語に似てゐるといふ結論になりはしない。この代名詞を滅多に用ひないといふ理由は、日本語と同じ理由からではなくして、偶〻フランツ＝ボースがアメリカインヂアンの言語に就いて云つてゐる、その理由と

同じ理由からなのである。『アメリカインヂアン語では、一々の動詞に人稱を表はす接辭が附くものだから、それで明瞭になるので、獨立の代名詞は、あつても用ひられることが稀である』と。("Handbook of American Indian Language," 1911)

次に、動詞へ、人稱差別が結合してるといふことも、その人稱が主格關係ぎりの事ならば、歐羅巴の白人の諸國語が皆さうであるばかりでなく、ウラルアルタイ語族でも大概さうだ。日・鮮・滿・蒙を除いては。尤も蒙古語でも、古い形を存してるブリャート語にはやはりある。なほ滿州語と同系の分れであるツングース諸族の言語にも大抵はある。例へば樺太に住むオロッコ語などでも。

然るに、アイヌ語には、目的格の關係の人稱差別もある。樺太アイヌ語では雅語口語共に in-(或は i-)は「我を―」であり、北海道の雅語では i- が「我を―」である。但しその口語では單數 en-「我を―」であり、複數は i-「我々(相手をも含む)を―」、un-「我々(相手を含まぬ)を―」である。第二人稱は、すべてに通じて、やはり單數 e-「汝を―」、複數 echi「汝等を―」である。第三人稱はすべてを通じて、やはり、何の接辭をも取らないのがその形である。

故に、その活用表は次のやうになる――

	樺太	北海道口語單數	同複數	同
彼が私を打つた	inkoik	enkoik	ikoiki	unkoiki
彼が私を見た	i(n)-nukar	en-nukar	inukar	unnukar
彼が私に與へた	i(n)-konte	en-kore	i-kore	un-kore

彼が私に聞かした	i(n)-nure	en-nure	i-nure	un-nure
我に與へよ(頂戴!-)	i(n)-konte!	en-kore!	i-kore!	unkore!
我を見よ(我に逢へ)	i(n)-nukar!	en-nukar!	i-nukar!	un-nukar!

所がこの目的格活用といふものゝ存在する言語は、古くは Accadia の語がそれだつたらしく、Ural 系の中では Vogul 語・Mordvin 語などにも少しはあるらしい。樺太のギリヤークの語にも、私の見る所ではやはりある。併し外には我々の國語の周圍や附近などには絶えてないことである。

併し、それに止まらず、アイヌ語には、更に一動詞(勿論他動詞にのみあること)が、この主格と目的との人稱接辭を同時に取ることがあるのである。例へば、

	樺太	北海道
私が汝に與へた	an-e-konte	chi-e-kore
汝が私に與へた	e-in-konte	e-en-kore
我汝等に與へた	an-echi-konte	chi-echi-kore
汝等我に與へた	echi-in-konte	echi-en-kore

この、人稱辭が二重に一動詞の語體へあらはれる言語を、言語學上、抱合語(Incorporating language)と云つて、歐羅巴では、フランスとスペインの境のピレネ山脈の中に行はれるバスク語がさうであるだけ、あとはベーリング海峽附近から、エスキモー語、それからして、アメリカインヂアン語・メキシコ語などが皆さうである。南洋やアフリ

カの方には今迄知られた限り存しないことである。

第一人稱の複數が常に二種あつて、「相手をも含めていふ吾々」は言語學上之を包括形 (inclusive) と呼び、「相手をば含めずに云ふ吾々」をば對立形 (exclusive) と云ふもので、代名詞及び人稱接辭にかういふ區別を有してゐる語は、これまたベーリング地方からエスキモー語・メキシコ語及び南北アメリカインヂアン語がさうである。尤もこれは、南方でも南米の方へ近いポリネジア語などの上にも見受けられる。

包括形の a- が凡てを包括して一人稱・二人稱・三人稱のみならず汎稱になつてしまふらしく、「食物」を a-e-p (e は「食ふ」、-p は「物」)、着物を amip (mi は「着る」、p は「物」) と云ふ様に云つて來、一層包括的に且つ一層不定的になつて(たゞぼんやりと「人々が」といふ程の意味から)「東京と云ふ所」など云ふ時に "Tōkyō sekor a-ye kotan" (se kor は「と」、ye は「云ふ」、kotan は「所」「村」「鄕」)など云つて來る。かゝる所は隨分、「食はれる物」「着られる物」「云はれる所」と受身に譯せば譯されるところであるが、アイヌの心では、尙能動 (active sense) で云つてるのであつて、決して受身のつもりでは云つてゐない。「人々」「みんな」といふやうな a- の意味を持つてゐる。所が、「馬が熊に殺された」を Umma kamui orowa a-raike (kamui は「熊」orowa は「から」raike は「殺す」) と云ふに至つて、立派に受身で、畢竟アイヌは、受身の語法をこの包括形の第一人稱複數の形から造り上げてゐるのである。

併し、不定稱や汎稱の場合までも、皆同一形であるから、全部を (いくら受身に譯し得られるからと云つて) 受身と見做したら、チェンバレン氏の云ふやうに、アイヌは、無茶に澤山受身を使用するとなつて來るのであるが、眞に受身と見做すべきは、最後の例のやうに orowa (から) 卽ち英語だつたら by にあたる様な語の伴つた時ぐらゐなも

ので、これが伴つて出て來る場合は、決してさう多くはないのであるから、實際は、アイヌは、さう澤山受身を使用しない言語だと云はなければならないのである。

最後に、所謂前置詞の問題であるが、チェンバレン氏の擧げられた樣な語形は、日常側近のことに澤山用ひられる形で、あの例の語、卽ち東・西とか、南・北とかいふやうなもの丶ほかにも、濱の方とか山の方とか、前とか後とか、奥とか邊とか、上とか下とか云ふ樣な語に、o を附けると「から」の意味になり、e を附けると「へ」の意味になる。例へば、

o-kim-un san　山から(彼が)さがつた。

e-kim-un arpa　山へ(彼が)行つた。

o-pish-un ek　濱から(彼が)來た。

e-pish-un san　濱へ(彼が)さがつた。

この kim は「山」、pish は濱、un はたゞ位置を示す助辭である。そして、o は「尻」といふ語、e は「顏」といふ語である。畢竟「山へ尻を向けての運動」が「山から」になり、「山へ面しての運動」が「山へ」になる。他も同樣の關係で、かうして、「から」と「へ」とが云ひ分けられる。これは實に原始的な面白い語法で、「前置詞」といふよりは接辭と云ふべきだから、チェンバレン氏の說明は誤であるけれど、かういふ語法は日本にはないから、これを擧げて日本語との相違の論據とすることには少しの誤もない。

アイヌ語の特徵を列擧するとなると、以上の外に、ほかは暫く省略するとしても、唯一つ是非擧げて置かなければ

ならない事は、人稱接辭の附いた動詞の語體へ、更に、e-o-u-i-などの接辭が結合して種々なる意味を添へ、一動詞さながら一文の觀を呈して、所謂輯合性（Polysynthesis）をもつことで、これは西隣のアジアの諸國語や南洋方面の言語にもアフリカ方面にも絕えて見受けざる特質で、たゞ、ピレネ山間のバスク語や、極北種族・アメリカインヂアンの言語に見受けるだけである。

この樣な性質をもつアイヌ語は、たとひ少許の單語の類似が見出されても、到底我々の國語や、アルタイ語族とも同系の言語であるとは云ひがたい。やはりアイヌ語は、アジアの東隙に、その住む國が離れ島を成してゐる如くに、世界言語の上にも、飛び島を成してゐるものであると斷ぜざるを得ない。

第四章　國語になつたアイヌ語

エゾ（蝦夷・狄）　アイヌの前名。この名は平安末期、鎌倉初頭の頃から、蝦夷族を云ふ名としてあらはれて來、鎌倉以降の文書には、よく狄の字で書かれてやはり讀むには、專らさう讀ませてゐる。津輕家・松前家の文書みなそれで、口には私共の幼い頃までやはり松前のエゾとのみ云つて來た。アイノ・アイヌと一般がいふやうになつたのは比較的新らしいことである。それは、昔から呼びつけて來たエゾの名がその人々の耳に、侮蔑的に響いて、いやな名になつて來て、さう呼ばれることを好まなくなつたといふことは江戸末期の人々の彼の地へ渡つた見聞記によく見えてゐる。それで、アイノと呼べば、喜んで返事をすると云つて、段々アイノと云ふやうになつたのである。

今の北海道アイヌには、エゾの名はやはりいやな名になつて、通用しなくなつたが、しかし樺太にはまだ生きて居

る。北海道の人々ほどに、內地人のさう呼びかける人に澤山出逢はなかつたものだからであらう。依然として、あの人々を云ふ名として、否寧ろ(神に對する)「人」といふ語として、又、和人に對するアイヌの意味の語として、換言すれば、アイヌと同義語として、往々それと對語にして使はれ、古語として取扱はれて居て、少しも侮蔑的意味が無いのみか、改まつた時の四角張つた詞遣に用ひられる。いはゞ雅語となつてしまつてゐるのである。卽ちその發音は enchiu 或は enchu であり、淸濁相通なものだから、enju とも發音される。平安末期の人々が、これを眞似てエゾと云つたのが起原であつたらうと思はれるのである。

エミシ・エミス(蝦夷)この人々の最古の名。恐らくは、上述の enchiu, enchu の今一つ前の形が emchiu, emchu だつたので、その時代の邦人に、エミシ・エミスと傳へられたのであらう。そしてこれが、こちらへ入つてからこちらの口でエビシ・エビスなどと訛つて來たものだつたに違ひない。語尾のシ・スを省き、語頭のエミ(エビ)を蝦であらはして、東夷だから、それで蝦夷とあてたものであつたのであらう。

アイノ・アイヌ(愛儂・愛奴 Aino, Ainu)これは勿論同一語で、聞き樣で二樣に傳はつたものである。向の語として男子の稱であり、長者・分限者といふやうな意味があつて尊敬の感情が伴ふよい言葉である。一般に及ぼして「人」の意味になり、前述の enchu と同義になつたのである。永く傳はれると尊敬の意味も薄らいで、アイノ・アイノと呼びつけられることを厭ふ氣持が生じ、その爲に役所の文書には土人と呼ぶことにしたら、喜ばれた時代もあつた。併し本人同士の間には尙アイヌと呼び合つて本來の敬意を伴つて用ひられてゐる。

シャモ(舍毛・者某、sham)和人。『新羅之記錄』を始として、松前の記錄や數多の蝦夷物の書類に見えるこの語

は、アイヌが日本人を呼ぶ語として、或は蝦夷語で「人」を云ふ語として、擧げられてゐる。シャモは精確には sham であつて、藻汐草に、「平人、ヤ、シャモ」、（ヤヤは「たゞの」「平常の」の意）とあるシャモもそれである。sham はアイヌ語の側・傍の意、自國のものから區別をして、內地から行くものをシャムの何々と呼び、日本のことをシャムモシリ（sham moshir「傍國」）或はシャモロモシリ（sham-oro moshir「傍の國」）と呼び、日本人を遂にシャムと呼ぶに至つたものである。自國人ならぬ「わきの人」「はたの人」の意であつた。頭立つ人に對しては、「大」の意味のシ（shi）を添へて、シシャム（shi-sham）とも云つたのが、藻汐草に「人、シシャムまたシシャモ」とも、とある語である。一般に及ぼして遂にすべての日本人のことをシシャムと云ふ樣になつて行つたからである。當時の人々には「人」と夷（えぞ）とを分けるから、人は卽ち日本人のことで藻汐草などにもさう書いてゐるのである。因みに東方カムチャッカの方からロシア人がやつて來るとロシヤ人をもこの語で呼んで、フレシシャムと云つた。フレは「赤」の意で、フレシシャムは卽ち赤人であるが、アイヌに取つてはやはり東方の「隣人」だつたからである。

オッカイ（okkai）四十前後の成年男子をアイヌ語でさう云ふ。松前舊記などには乙孩などと書いてゐる。

ウタリ（utari）同族、儕輩、家の子郎黨。アイヌ語の utar（人々）の所屬形で、「の人々」「彼の人々」「彼の族・人・郎黨」などいふ意味の語である。侑多利などの字が宛てられてゐたものである。

永正十二年夷賊徒蜂起、六月二十二日、光廣朝臣、以レ計（中略）招ニ入夷賊之酋長庶野（ショヤ）訇峙（コウシ）兄弟幷侑多利（ウタリ）ニ一日行酒。

（正保三年舜亮撰松前舊記）

現代では、『若きウタリに』といふ歌集もあり、雜誌にも『ウタリの友』といふのがある。

オムシャ・オグシャ・オゴシャ (umusha)有司巡島の折、蝦夷に謁を賜ふといふやうな儀式的會見をする。その時、一同へ酒食を振舞ひ大饗宴を開く。アイヌの方でそれをウムシャ (umusha) と云ふ。通辯などの發音ではオムシャ・オグシャ・オゴシャなどと訛り、旅行家は、よい加減な字を宛てゝ恩赦などと書いてゐる。アイヌ語の方では「交歡」の意味でしか無い。musha は久濶を叙し、或は再會を喜んで、體をなでゝ親しく會釋することである。語頭のウは「相互」を意味する接頭辭で、有司の和人の側と村のアイヌの側と、相互の好意をあらはして歡びをする意味だつたのに、一方的に取つて恩赦などいふ勝手な字で音譯してゐたのは、蟲の好過ぎた誤りである。

ショチキネ(shutu) 戰爭に用ひる棍棒。白石の蝦夷志や、林子平の蝦夷圖説、義經勳功記などに武器としてショチキネを擧げてゐるのは、物その物が杵に似てゐるからで、ショチは shutu (棍棒) である。戰の武器として實際に打ち合ふものは、刀よりも寧ろこれだつたのである。刀の方は寧ろ宗教的な、降魔破邪の意をもつ儀式用の裝飾、護身用の寶であつた。

スツ (sutu) 決鬪用・刑罰用の棍棒。語原的には前條と同じ語であるが、これを以て打ち合ふことを「スツ打ち」と呼んで、數多の蝦夷物の書類へ出て來るのは、戰鬪に用ひるものよりは短く、打ち方及び打たれ方の練習があつて、有司巡村の折、オムシャの後、酒興に、その面前で演技して見せるのが習慣になり、勇壯なものとして喧傳されて、色々な蝦夷物の本にこの名が散見するのである。

メッカ (mekka) 刀背。「スツ打ち」と共に喧傳される「メッカ打ち」と云ふことがあつて、後には屢々混同され、「メッカ打ち」の名で「スツ打ち」のことを述べてる書物も澤山あるが、全然別の行事である。メッカ打ちの方は、死人のあ

る時、最も縁故の深いものを、親類が刀の背でその眉間を打つて血を流させる儀式で、死靈が取りつかない爲めのまじなひに起つた舊習であつた。

サケ・スケ(鮭) 東國にて鮭をサケノヲ・サケノイオ・サケノヨなど云ふのは鮭の魚であつて、さけは外來語の趣がある。アイヌは鮭はシイペ (shi-ipe「眞食」)又はカムイチェプ(Kamui chep「神魚」)と云つて、魚を常食としたアイヌでは最も大事にされる魚である。内地では、昔は鹽をした干鮭だけを鮭と思つて粗末な魚と思つてゐたが、鮭の獲れる本場では、やはり大事にして鮭の魚と云つてゐたのである。鮭と似てゐて、外國などでも屢〻一緒にされる鱒は、江戸でも區別をせずに鮭と一樣にシャケと呼んでゐたものであるが、鱒は夏に獲れるもので、鮭は秋に獲れるものだから、アイヌの夏日の常食は鱒だつた。それでアイヌ語でシャケンベ、サケンベ、もつと精密には、シャクイペ又はシキペ(sak-ipe, shak-ipe)と云ふのが、邦人に江戸時代からシャケンベ・サケンベと訛られてゐた。恐らく、シャケ・サケの語原であらう。鮭の方は、邦語ではアキアジ(秋味)と云はれてゐた。奥州や常陸で、産卵の爲に秋遲く川へ上る大鮭をスケと呼んでゐた。これが、アイヌ語の鮭を呼ぶ今一つの名、卽ち「秋味」の稱の原語チュクチェプ (chuk chep「秋魚」)のチュク「秋」に關係がありさうである。チュがシュ若しくはスとなるのは國音の轉訛の常である。卽ちシャケとスケとは、アイヌ語の夏(shak)と秋(chuk)とであるらしい。

ユタラベ　津輕・松前邊の人達が、夷女に誂へてその特技の刺繡を施させて衣類に仕立てゝ着ることがあつた。稱してユタラベといふと。

「夷人の縫を乞ひてユタラベといふ」(淡齋著、「松前方言考」)

思ふに「模様づけ」はアイヌ語にチタルペ又チタラペ(chitarpe)といふ。今日では、着物の模様の刺繡はチカルカルペ或はチカラカラペ(chikarkarpe)といひ、花莫蓙の模様や、それで造つた手提袋(カバン様のもの)の模様附けにチタルペといふが、チタルペの外に、イタルペ或はイタラペ itarpe ともいふ。秦檍丸の蝦夷産業圖說に、アイヌの衣類を數へて互に以多津邊(イタリッペ)を擧げて、「樹皮を織り、領緣及背に刺繡し家文の如し」と註したのは恐らくはこの語で、イタラペを誤つて以多津邊としたものであらう。このイタラペと、松前方言などにいふユタラベとが同原らしい。

モチフ(Mochip「小舟」)「松前方言考」に『漁業をする釣小舟を持府(モチフ)といふ。チップは夷人の詞也。和人もおしなべて云ふ所也。福山舊記云、モウチップ艨軍船にて、則ち廷尉義經など乘渡りしいくさぶねをさして後人云ふと見えたり。』とあるが、義經に思ひ合せたのは妄斷である。モはアイヌ語に小なる意味がある。

トドまつ(椴松 todorop) モミ屬の喬木。トドとも、トヾ松とも古くから云ふ。安政の「松前志に」『トヾ、本字本名未詳。方俗の稱なり。亦トドロップといふ。これ夷方の詞なるべし。椴の字用ふれどもあたるべからず云々。木理を視れば白樅(シラモミ)と云べし。柏樹(柏作栢非)此物に近からんか』と。今アイヌはこの木をフプ(hup)といひ、トドロップといふものがなく、「北海道樹木志料」にも、北海道植物名詳表にも、バチラー博士の辭典にもトドロップの語は絶えて見えない。恐らくは入口地方のアイヌ方言の疾くに廢語になつたものであらう。津輕にゐた蝦夷もこの木をトヾロップと云つたらしいことは津輕一統志に確證がある。寛文十年、津輕藩が幕命を受けて祕密に蝦夷地を探検した時、津輕蝦夷を通辭に連れて日高へ上陸した時の報告に、その邊の山にある樹木を舟から見て列擧した中に、トヾロップの名が見えてゐるのでわかる。この一行は、北海道アイヌとは、すぐ衝突して探検を遂げ得ずして歸藩するので、北海道

アイヌ語を記する餘裕が無かつたから、正しく同伴した津輕蝦夷の語であることは前後の事情から見て明かだからである。

さすれば、語形から見てもアイヌ語らしいこのトドロップは、或は todorop などいふ入口地方のアイヌ方言だつたかと思はれ、それを邦人が口にするにつれて下略したのが、今のトドとなつたものであらうと推測されるのである。

カバ・カニハ(櫻皮・樺)。えぞうはみずざくら。今日はカバ(カンバ)は白樺などの屬の名となつてゐるけれど、神代の卷の香山のハハカ(朱櫻)が今いふカバザクラだと云ふし、萬葉集には(六の十八)「櫻皮(かには)纒(ま)き、作れる舟に」とある。それが、倭名抄(廿)には「樺、加波(カバ)、又云、加仁波(カニハ)」と見えて居り、大言海は、カニハ・カンバ・カバは「何と・なんど・など」と同じ變化であり、そのカニバは、カニハザクラに同じとして、櫻の方に解し、『樹皮は物を卷くに强し』とか『皮は物を卷くに用ゐらる』など云つてゐる。さうすればアイヌ語原ではないかと思はれて來る。なぜなら、アイヌは櫻皮をカリパ・カリンバ(或は、カリッパ)と云ひ、やはり舟を造るに、あの樹皮を以て卷いて綴ぢ、弓などをもこれを卷いて重籐のやうにしたり、曲げ物などをも、東北地方でやるやうにアイヌでもこれで綴ぢなどすることである。そしてぐるつとまはつて纒くことがアイヌ語で karipa である。

カリパがカニバとなることは極めてあり得ることであり、北海道中にあつて、その皮が、さういふやうに用ひられるあの櫻の木をアイヌ語でカリンパニ (karimpa-ni)といふ。ニ(ni)は木といふことである。

眞樺のことをもアイヌはカリンパタッ(karimpa tat)といふ。タッ(tat)が凡て眞樺や、白樺や、ダケカンバや、ヤチカンバなどの總名で、眞樺の皮が又さういふやうに用ひられるから、それでもカリンバタッであつたが、我が國で

はカンバの名がこれらに專らいふことになつて、櫻の皮のことだつた本義が忘られて來た。若しか日本の古名が朱櫻(ハハカ)で、カニバザクラは東國人のいふカニバを取入れて來た語ではなかつたかとも想像されるのである。

シウリ (shiuri) 薔薇科サクラ屬の樹木。みやまいぬざくらといふのも一つものらしいが、この木がアイヌではシウリ(shiuri)である。

シンコまつ(――松)、エゾマツ(shunku)の内のアカエゾマツが、アイヌでは「たゞのシュンク」といはれるが、このシュンクを訛つてシンコとし、松を附けてシンコマツと云ふやうになつてゐる。

グイまつ(――松) 落葉松である。アイヌ語ではクイ(Kui)であるが、濁音に聞こえたものらしく諸人士之をグイまつと傳へたのである。

ヒネキリまつ 這ひ松のことである。根室地方から千島の島々及び擇捉の方に多く、エトロフアイヌ語でこの木をヘネッケレ(henekkere)と呼んでゐる。ヒネキリまつの名はそれから出たものらしい。

イケマ(ikema) 牛皮消、蘿藦(ががいも)科の植物。根を藥用として馬の病に効があるといはれるもの。日本の學名イケマと云ふやうであるが、江戸時代から蝦夷物の本によく見えてゐるので、それを採用したものであらう。アイヌ語でこの物を Penup といふが、また殆んど全地方のアイヌ語で ikema ともいふ。有毒植物であるらしいが、アイヌは色々の効驗があるものと信じ、旅立などには必携のものとなつて居る。沖へ出漁の折などにも携へて、根を細く刻んだのを、口中に含んで吐き出すと、沖の浪が鎮まり、雲霧も收まるものだなどと信じてゐる。かやうに重んじられてゐるものである上に、その發音が偶〻邦語の生馬に通じる所から、邦人は、これを馬の藥であるやうに言ひ傳へ、考へも

した。それがまたアイヌへ入つて信じられてもゐるが、この方はアイヌに取つては後の外來信仰に屬するもので、アイヌの古老の中には「藥だか、どうだか、澤山食べさすと、馬でも醉ふものだ」と云つてゐるものがある。

シコロ　蘗・黄蘗・キハダ。アイヌ名シケレペニ(shikerpe-ni)である。シケレペとはその果實、アイヌは好んで之を炊ぐ。ほろ苦い味をもつが、植物性の食料の重要な嗜好品となつてゐる。このシケレペの生ずる樹の意味でシケレペニといふのであるが、我が邦では、その樹幹の眞黄なる點から黄膚(キハダ)と呼ぶ。卽ち我が國ではキハダが本名で、語原もわかるが、シコロは別名であり、その意義が不明である。殊にキハダの樹の果實は、藥用にして、シコノヘイと呼ぶことが愈〻わからない名である。若しやシコノヘイはシコロペではあるまいか。アイヌ語の shiker-pe がシコロペに訛り、その樹がシコロといはれるのであつたら、正にアイヌ語原である。

トチ(橡・栃)、七葉樹・沙羅樹。無患樹科の喬木。この樹の名はアイヌでもトチニ(tochi-ni)であつて、ニ(ni)は「樹」であるから、正しく同じ稱呼である。何れが元であるかわからないが、アイヌの方でもこれは本來のアイヌ語であると考へて居り、ほかにアイヌの本名といふものがないらしい。植物名詳表にも、全地方の語が皆一樣に tochi-ni となつてゐて、更に別語がない。若しアイヌから日本へ入つた語だとすれば、カバなどと同じ樣に、本州アイヌ語から入つた極めて舊い由來のものでなければならない。

但し、一つの疑問は、「樹木志科」に、トチの木の土言としてヲショロといふ語を擧げ、「北海道志」また土言、ヲショロとしてゐることである。して見れば、古い北海道アイヌ語に oshoro といふやうな名が存したもので、現今忘れられて、邦人の云ふトチの名を一般に用ひてゐるのであらうか。

オヒョウ　楡科の喬木、おひょうだも。樹皮から厚司を織るもので、アイヌでは最重要な樹であるが、そのアイヌ名はアッニ(at-ni)で、それから織る布が at tush 卽ち厚司である。北海道方言この木を、オヒョウダモと云ひまた單にオヒョウとも云ひ、これが今日この樹の日本の學名となつてゐる。では北海道方言のオヒョウは、どういふ語であらうか。今日までこれを外來語と見てゐる本はない様であるが、樺太の古老がオピウ (opiu) と云ひ、これから織つた布を opiu kah rush と云つてゐる。kah は「皮」である。このオピウが若しやオヒョウの語原ではないかと考へられるのである。但し、外の書にまだ opiu といふ單語を拾ひ上げてるのを見ない。

アツシ(厚司)　織物の名。オヒョウの木の皮の纖維を曝して機に掛けて織り出した布で、オヒョウが通名 at であるから、布を at-tush といふ。淡褐色で、厚い布であるが、雨をはぢき、夏涼しく冬暖かに、且つ、強いものであるから貴重される。アカダモから織るものほど赤み味が濃くなく、科(しな)の木から織る「まだぬの」よりも淡色で、蕁麻から織るものほど白く光澤ありはしないが、日本の木綿の布地の輸入品が今ほど潤澤で安價でなかつた時には、これが通常服として、昔の毛皮の着物を耻ぢた部落の人々に、襲に取つて代つて多く用ひられたものだつたから、アッの樹も部落に近い山々には大抵採り盡されて、樺太には最早殆んど見がたくなり、北海道でも奥山へ行かぬと採取出來なくなり、木綿の得易く安價になつた今日では、日常服には見られなくなりつゝある。attush の tush は綱・繩などのことであるが、樺太のやうに、もと或は at-rush であつたかも知れない。rush は皮のことである。尤も、一般の皮は kap で、木皮は nikap が今日普通であつて、rush の方は獸の皮に用ひるが、それは獸の皮が一般の衣服だつたからで、それに代はる樹皮が用ひられる時に、at-rush と云つたのが、音韻同化で at-tush になつたものであらう。今日

では木皮の織物がすべて attush と呼ばれようとして、アカダモの布をも nikap attush などいはれる。しかし樺太では、

オピウの皮のを opiu-kah-rush

赤ダモの皮のを ni-kah rush

蕁麻の皮のを kah rush

そして北海道の attush といふ語をば at-rush と發音してゐる。rush が樹皮の布一般に通じてゐる。

併し機のことをば、北海道で attush-kar-pe「厚司を造るもの」、樺太で ahrush-kara-ampe「厚司を造るもの」と云ふから、やはり厚司が代表名のやうである。

さてこの厚司が江戸時代大阪の方へ蝦夷地土産として齎らされたのが、はしけ人夫や、荷馬車曳などの前掛などに、アイヌ語をそのまゝアッツシの名で用ひられてゐる内に、地厚な織物であるから、「厚」の意味が語原意識に登つて來て、厚司といふ宛字が起こり、段々原料の無くなる所から、オヒョウ以外のもので織る所の同じ用途の布地へ依然この名が襲用されて今日に及び、大正頃から東京にも本郷湯島通りなどに厚司專門の店などを見たが、働く人の用ひる地厚の織物で、もうアイヌの織物とは何の關係もなくなつて、名稱だけが使はれてゐる。

オッコ・オンコ　いちゐの東北方言。いちゐ・あらゝぎと同じ種類の木であらうが、寧ろ東北地方の伽羅木(きやらぼく)と似てゐて、伽羅木ほど矮性ではなく高く立つ。アイヌは之をラルマニ（rarma-ni）といふ。辭書やその他從來の書には raramani 或は raramani と書いてゐるが嚴密には rarmani なのである。それを松前の人々はオッコと云ひ、津輕の人

はオンコと云ふので、今では專らオンコ・オッコが通り名になつてゐて、アイヌにも通用はするが、本當のアイヌ語ではさういはずに必ず rarmani と出て來る。併しオンコ・オッコは日本の他の地方では云はない方言であるから、これもトドまつのトドの様に、津輕海峽附近のアイヌ即ち松前地方や本州北部の蝦夷のアイヌ語であつたらうも知れない。尤も onko にしろ okko にしろ、アイヌ語形ではあるが語原は未だ詳かにならない。

ムリツ・モロチ(てんきぐさ)　禾本科の植物。アイヌでは土間に敷く薦を織つたり、籠に編んだり、要用な草であつて、アイヌ藁といふ名さへ生じてゐる。併し所の和人たちは、モロチとかムリツとかいふ名で呼んでゐる。それはアイヌ語の murir, murur といふ草であるから、多分このムリルがムリツに、轉じてモロチとなつたものであらう。

ホッキ(北寄)　貝の名。舊くより東北地方で用ひてゐる語で、露伴博士の紀行文の中にも見えてゐたが、中央には近年になつて入つて來たのかも知れない。馬鹿貝の大きい様なもので、今はホッキと云つて、鑵詰が大デパートはどこにも來てゐる。この貝の名の語原に就ては、露伴博士が、北の海にある貝だから北寄か、と戯れて居られたが、アイヌ名はポッキセ(セは「貝」)であるから多分はそれの日本語化したものであらう。アイヌ語ポッキセは、語原的には pok se であつて、pok は下(しも)といふこと、轉じて女陰のことである。

ラッコ(rakko)　臘虎・獵虎。易林本節用集に蠟虎、享保の合類大節用集には、獵虎俗作二蠟虎一と見え、またその外に臘虎、時として獺虎などと書かれるが、ラッコの音を寫す爲、早くはラウの音を用ひたが近代は、合理化して「獵(レウ)」「獵(レフ)」など色々の字が用ひられる様になつたのである。倭訓栞に、「蝦夷人はゑりといひ、老獵虎をしひにといふとぞ」とあるは、何に據つたか不明。「獵虎島は蝦夷より百里ありといへり」とあるは今の得撫島のことを、古く、さう云つ

た。こゝは、當時無人島で、ラッコの產地であり、擇捉・國尻・厚岸あたりの蝦夷がそれを捕りに出獵する島だつたからである。

膃肭臍(onnep, uneu) 本草綱目に海狗腎也と云つてゐるもので、支那語で海狗といふものを、外來語にオンネウとかオンネプとか云ふのを、そのまゝ音譯して膃肭とあてたのに外ならない。物そのものは奥州・津輕・蝦夷の產ものを支那へ渡來してゐるのであるから、蝦夷語の onnep 或は uneu などが、膃肭と音譯した原語に近い。それを日本で「膃肭臍」として、漢方で之を又取入れ、オットセイと發音し、獸の名をば膃肭獸など云ひ、甚しきはヲットセイに對し、俗間に、その牝をメットセイと呼ぶものがあるに至つたのは滑稽である。この海獸、皮や肉は用ゐられず、藥用としてその下腹部、腎からかけて陰部が大切な交易品として支那へ行つたから、本草書に、龍角・牛黄・熊膽・豚卵・獺肝などに並べて膃肭臍と擧げてあるのである。だから時珍が、膃肭臍を海狗腎也と注したのである。道春の多識篇に「膃肭獸宇仁宇海狗」と出して、膃肭臍の條の註には、宇仁宇乃倍會又云、宇仁宇乃多計里 とあるは、この臍と陰莖と並に藥用にされたからであり、蝦夷の原語ウニウを知つてゐたのは江戸の初期、我が國の蝦夷松前へ到るものなどの口から、このアイヌ語が傳へられて道春の博識に攝取されてゐたことを見せて居る。

トド(tondo) 魹。葦鹿・海馬の類を東北及び北國でトヾと云つてゐるのはアイヌ語原であらうかと思ふ。中世以來トヾの寢流れなど云ひ、よく眠るをトヾの性など云つてゐたのは、大きな、牙の長い葦鹿のことで、トド島といふ海岸の岩礁は、東北の海岸から北海道の諸地方にあるのは、この海獸が、時々あがつて休息する海中の露岩である。アイヌは葦鹿・セイウチ共に etashpe と云つてトヾとは云はないが、葦鹿の巨大なものは(セイウチも)、往々全身殆ん

ど無毛の裸皮になるものであるさうで、アイヌ語のトンド(tondo)はその無毛の裸皮のことである。恐らく意味の轉じてはひつたものであらう。和名抄に、葦鹿は、和名阿之加、見二于陸奧出羽交易雜物中一矣と見えてアシカも夷語かと思つてゐるが、今北海道アイヌには當るものが見えない。

コサ(胡沙)　蝦夷の口より出す息。夫木鈔の『こさ吹かばくもりもぞするみちのくの蝦夷には見せじ秋の夜の月』のコサである。蝦夷人が口から息を吐くと霧が起つて、あたり一面かきくもつてしまふ、といふ傳說に基いた歌である。それに就て、いくら蝦夷人だとて人間の身でさういふことが出來る筈が無いといふ合理的な後世人が、種々附會說を出して遂に馬琴などは胡塵の意味に說きおほせた。或は『胡笳一曲斷人腸』『胡人向レ月吹二胡笳一』などの『胡笳』に類推してアイヌの吹奏樂器にしてしまひ、チャルメラの樣な木皮の笛にしてしまつたり、甚しきは、沖へ出て霧の深い時に、イケマの根を細く刻んだものを含んで吐くと晴れる、といふ信仰があるのを報じて、霧が起ると霧が晴れると正反對なのを押し切つて、胡沙吹くとはこの事をいふんだ、といふ曲說も出た(イケマをコサといふのは陸奧方言であるから、アイヌも或はコサと云つたかも知れない)。併しアイヌ語で息は husa であるから、恐らく、平安朝期にこれを取入れたら、コサとなつて取込まれた筈である。

右のほかに、何れが元か、問題の語彙がある。

今まで擧げた中にも、多少問題になるものがあつたが、次に擧げるものは、全く何れが元で、何れが取入れたか今後の研究を俟たなければ容易に決められない。

トマ(苫)　天智の御製にもある通り古い語であるが、アイヌでも古語にトマ(toma)があつて、菅疊・菅薦のことである。死體を包む蓆もトマである。樺太では日常語にも草織の蓆をさういふ。

鮪のシュンビ

鯖のシャンパ

鮫のサメ又はシャメ

藻魚(もいを)のソイ、和人もソイと云つてゐる。

植物名では

コンブ(昆布)とコンポ

マタタビと、マタタンプ

アザミ(薊)とアンツァミ

ミヅ(みづ科の草)とミンチ

コヂャック(濱芹の東北方言)とコチャク

バッカイ(蕗の塔)とマカイヨ

次には偶然の一致、所謂暗合か、それとも交渉のあるものか、問題になる語彙。

邦語の黒(くろ)・暗(くら)・暮(くれ)の語根と、アイヌの黒・闇・夜などを意味する語根のクル(kur)とがよく似てゐて、何れが元と定め

切れない。

邦語の連(つれ)・列(つら)のつれ・つらと、アイヌの「同伴」の意味の tura や turen や、「人々」の意味の u-tar. が似てゐる。

邦語、越(こ)す・くすの語根と、アイヌ語「通る」意味の kush とが又よく似てゐる。

邦語のかぶる・かぶさる・かんむり、などの kamu とアイヌ語のかぶさる意味の kamu かぶせるは kamure 複数はカㇺパ kampa. kanpa.

邦語、磯(いそ)・荒磯(ありそ)の「いそ」及び「そ」と、アイヌ語のイソ(iso)及びソ(so)と。アイヌ語のイソ・ソは海岸の露岩。

邦語の岩とアイヌ語の iwa であるが、アイヌ語のイワは山のことであつて、邦語のイワは巖のことに過ぎないから、別語の筈であるけれど往々にして意味が重なり合つて、同じに思へ、アイヌ人もアイヌ語のイワを岩の意に解してゐることがある。

邦語の皮(かは)とアイヌ語の kap (皮)ともよく似てるといへば似てゐる。

邦語の手とアイヌ語の tek (手)との間にも多少の聯合がある。

ヤト・ヤッ・ヤ(谷戸・谷地・谷) この語が關東の地名に低平な水氣の多い草生の土地に名づけられてゐることは世間周知のことであつて、常陸風土記の昔からヤトの語が見えて今に至るまで大谷戸(オーガヤト)(オーゲットと訛る)・高野谷戸(コヤガヤト)・伊保谷戸・北宮谷戸(キタミヤガヤト)・馬喰谷戸・篠ケ谷戸・蕪谷戸(カブガヤト)・小谷戸・忍谷戸・谷戸山・扇ケ谷・比企ケ谷、また熊ケ谷・阿佐ケ谷・千駄ケ谷・澁谷・四ツ谷・市ケ谷・世田ケ谷・下谷・山谷のやうな地名になつてゐ、東奥地方では、ヤト・ヤツと同原らしい谷地(ヤチ)といふ語が、水氣の多い草生の土地に今でも普通名詞に使はれる。抑もこれがアイヌ語ではないか、といふことは、既に

諸家の論議に上つてゐる。成程アイヌ辭典に yachi.「沼澤」とあるから、一見誰でも簡單にアイヌ語原說に片づけてしまはれるのであるが、この語は、アイヌの昔噺にも詞曲や神謠にも出て來る語ではなく、和語と意識してアイヌが使ふ語彙の中の一つに過ぎない。だから本當のアイヌ語で云ひ替へるとすぐ改めて、ニタッ(nitat)とかサㇽ(sar)とかトマㇺ(tomam)などと云ふのである。アイヌ辭典にあるヤチは、アイヌの口から採集された所の邦語なのである。

然しその邦語の起原はどうか、となると、これがまた難問である。東國にしか無い所を見れば、或は蝦夷語の殘存物であるかも知れないのである。たゞしその蝦夷語は、本州の蝦夷の語で、今日のアイヌ語とは餘程ちがつてゐた所の蝦夷語でなければならないし、關東に蝦夷語が行はれてゐたといふ想像は、神話時代にはひつてしまふので、一つの空想になつてしまふ。或は之を起原の未詳な上代日本語の東國方言と見て置く方が安全であらう。

邦語のヒラとアイヌ語のピラ。邦語のヒラは坂の意味で青森・秋田から裏日本地方にあつて琉球にまで存する語であるが、アイヌのピラは崖(がけ)の意で、一見似て居て必ずしも同じではない。これは偶然の似寄りで、別語であるかも知れない。

邦語のタイとアイヌ語のタイ。これも形は全く同じで意味にもいくらかの聯想はあるが、邦語のタイは高地の上面の平らな地形に云ふ語であつて、アイヌ語のタイは森林或は灌木や草の繁く生じたのにも云ふ語である。樹を意味することと熟合してニタイ(「ニ」は樹)が普通に云ふ林である。岩手・青森・秋田の何々タイといふ地名は平を書いたり、岱を書いたり、時には台をも書き、そのほか爾薩體・姉帶などのやうな宛字も見えるが、東北方言のタイであつて必ずしも皆々がアイヌ語のタイではないかも知れない。東北方言のタイとアイヌ語のタイとは、やはり、ヒラとピラとの

關係の様に、偶然の似寄であるかも知れない。

尙アイヌ語の水をワッカ(wakka)と云ひ、日本の船底へ溜まつた水などをアカといふことは誰にも知られてゐることであるが、最近、青森の北山長雄氏の發見に據れば、青森縣下の獵師の使ふ山ことばの中で、水をワッカといふことがある由である。漁師のアカと直接に關係があるか、アイヌ語のワッカに關係あるか、容易ならざる問題である。或はアイヌ語の殘つたものと觀る方が、少くとも興味がある様である。

結論

日本の內地の全土にアイヌが居たといふことは、今日まだ十分に論證されぬことで、今日我々の知る限度では、齋明紀の所謂陸奥の蝦夷、越の蝦夷、越の渡島(今の北海道)の蝦夷は、正しく今日のアイヌと同じ種族のものだつた。言ひ換へれば、アイヌは、北海道に居り、津輕海峽のこなたに居り、本州はその北部には居た。即ち日本の東北地方にアイヌが居たといふことだけは、吾々の少しも疑無しに信じ得る事實である。

「日本の東北地方」が、南は果して何れの邊までであつたか、蝦夷の居た最南の境は、どこまで南下するか、これは將來の大きな問題に殘されてゐて、今私の觸れる問題ではない。問題が「アイヌ語」である限り。

さて、東北に蟠居した吾々の古い隣人の言語が、どの邊まで我々の國語へ影響を與へたかを我々は吟味して見た。その結果は大體からいふ樣に出て來たと思はれる——

上古の大和民族の東國拓殖が進むにつれて、接觸・交涉、それから、雜居・雜婚、その間を時々紛爭や戰爭がコンマ

やセミコロンを成して遂に陸奥の五十四郡が出來上つたまでに、一體、そこに居住した蝦夷の言葉が、あとから來た大和民族にも話されて、所謂奧州辯といふ聞き取りにくい東北方言が成立したのであつたらうか。さう考へてゐる人が世間に澤山ある樣であるが、これは併し恐らく實狀ではあるまいと私の思ふのは、言語といふものは文化の高い方からは、自然に低い方へどし／＼流れ込むものであるけれど、反對に、低い方から高い方へは仲々流れ込まない。餘程特別な事情のある單語でない限りは。

その事情は、今日の北海道の拓殖の過程を見てもよくわかる。地名こそは、取込んでゐるけれども、普通の單語は殆んどはひつてゐない。僅かに函館あたりに、通な人の口に、海豹をトッカリと云つたり、湖岸地方に、湖水をトーといふのを聞くことがあるぐらゐである。

これから推して考へて觀るのに、奧州方面だとて、事情はほゞ同じ事であり得るから、所謂被征服者側の單語が、さう／＼ざらに高度の文化をもつた大和民族の社會に取りこまれて行きはしなかつたであらう。卽ちたゞ產物の名や地勢・地理上の名稱などに止まつた事ではなかつたであらうか。

どのやうに訛つて聞き苦しく形が變つてゐる表現でも、よく調べると、紛ふ方なき日本語に返つて、確かにアイヌ語であると思へるものは、さう／＼數はないのである。今アイヌ語であると確認できるものを拾ひ上げて以上のやうなものを得たのは、さういふことを具體化するものであらうと思ふ。地名に遺つたアイヌ語に就ては、私に別に『北奧地名考』があるから、今は省略に附して置く。

昭和八年十一月二十五日印刷
昭和八年十一月三十日發行
國語科學講座
（第五回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社明治書院